中国の『源氏物語』

『紅楼夢』

『紅楼夢』（こうろうむ）は、中国の四大名作の中で、最も文化的意義があり、最も文体的に優れた小説です。

本書は、虚構な賈（か）氏一族の栄枯盛衰を描いた作品です。賈氏は、宮廷の中で大きな権力を握っただけではなく、皇帝に娘を嫁がせ貴妃とすることにも成功しました。物語の舞台は清の時代ですが、実は、中国のあらゆる時代の文学作品、漢詩や詞の引用などが見られています。

著者の曹雪芹（そうせつきん）は、自身の幼少期の家庭生活をもとにこの本を書いたと言われています。曹雪芹は南京の江寧織造（主に織物を購入する宮廷の官職）を3代世襲する大変裕福な家庭に生まれましたが、父親の失脚などで次第に没落していきました。

康熙（こうき）帝が北京を離れた際の仮宮として、彼の実家を4回使用したこともあるほどの栄華ぶりでした。

主人公の賈宝玉（かほうぎょく）は、著者が自分自身をモデルに書いたと推測する人がたくさんいます。もちろん主人公は著者が最も時間をかけ、思いを投射しているキャラですが、私はヒロインの林黛玉（りんたいぎょく）のほうが、より著者と似ていると思います。物語の中で、林黛玉は両親を病気で亡くした後、他に頼れる人がいなかったため仕方がなく賈氏の家に移り住んだことから、衰退する賈氏と運命をともにすることになります。生まれつき病弱でしたが、賈氏の家長である賈母（賈宝玉の祖母）に最も愛され、優れた詩の才能の持ち主です。著者の曹雪芹は曹氏一族が雍正（ようせい）帝の寵愛を失った激動の時代に育てられたため、林黛玉と同じく少年期は住まいを転々としていました。また、幼い頃から文芸や詩歌に天才的な才能を発揮していました。

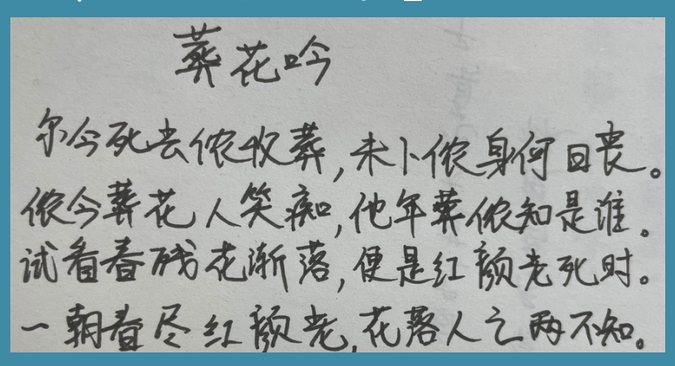
物語のはじめから、賈宝玉と林黛玉にはあらゆる面で似ているところが多く、数多くの恋愛を経験する賈宝玉ですが、林黛玉はそのなかでも特別な愛を育んでいる相手であることが明らかでした。また、宝・黛の二人は宮廷政治に対する共通の嫌悪感で結ばれることが多く見られますが、それは作者本人の感情が投影されされていると思われます。

しかし、林黛玉のライバルである薛宝釵（せつほうさ）の描写からは、作者の合理的な一面と内面の哲学的な悩みを垣間見ることができます。薛宝釵は地方の豪族の娘で、賈宝玉を立派な学者にし、賈氏の当主にするために力を尽くしていました。賈宝玉は薛宝釵の美しさに惹かれましたが、ロマンチック主義の彼は、お金や名誉のために努力する薛宝釵と生き方に大きな違いを感じていました。結局、賈宝玉は、賈氏一族を存続するために薛宝釵と結婚することにしました。これは、作者自身が、金銭など世間一般的な功績を得ることの重要性を理解し、一族のより良い未来のために、個人の自由を引き換えにしてもかまわないと考えていたことを示す証ではないでしょうか。

『紅楼夢』の結末で人生の無常を示した詞です
「餌がなくなった鳥は森に身を投げ、
雪が大地に降り積もって、白くてきれいだ」

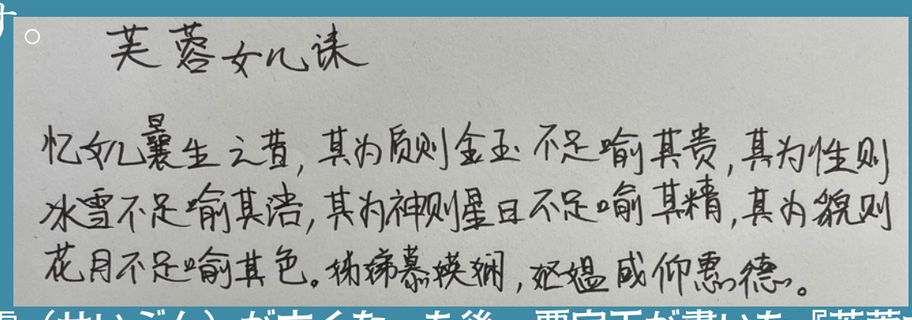
『紅楼夢』初回の絶句
「作者が辛抱してこの荒唐無稽のような小説を書いたけど、みんなにやりすぎだと言われる。誰かが理解してくれるだろうか。」

『紅楼夢』は、よく日本の『源氏物語』と比べられます。２つの物語が書かれた時代は、700年以上も異なりますが、どちらもその時代の最も栄えたころに書かれています。なお、曹雪芹は『紅楼夢』の賈氏一族の衰弱を通して、清王朝の滅亡を予言しました。どちらも恋多きの主人公ですが、『源氏物語』の光源氏とは異なり、賈宝玉には失敗が多く、登場する女性全員がすぐに恋に落ちるわけでもないです。どちらも、当時の宮中での男女の贅沢な暮らしを詳細に記録し、多くの詩歌を収録していることから、当時の様子を現在に伝える文化的に大変貴重な資料であります。歴史家の血の通わない言葉よりも、小説のなかで生きる生身の人間、特に旧社会の女性の姿や人生を、現在の読者の前にそのまま表してくれています。中国を理解したい読者の皆さんは、必ず『紅楼夢』を読んでみてください！この一冊だけで、中国文化を深く理解することができると思います。


葬花吟

尔今死去侬收葬，未卜侬身何日丧。
侬今葬花人笑痴，他年葬侬知是谁。
试看春残花渐落，便是红颜老死时。
一朝春尽红颜老，花落人亡两不知。

林黛玉が書いた詩『葬花吟（花を葬る唄）』
自分の悲惨な運命を散る花に喩えた美しい詩です


芙蓉女儿诔

忆女儿曩生之资，其为质则金玉不足喻其贵，其为性则冰雪不足喻其洁，其为神则星日不足喻其精，其为貌则花月不足喻其色。物瘁慕模糊，妪媪成仰慕德。

賈宝玉の侍女晴雯（せいぶん）が亡くなった後、賈宝玉が書いた『芙蓉女儿诔（芙蓉のような娘の弔い）』晴雯のことを歴史の中の英雄に比べ、「その性質は氷雪よりきれい、その精神は星より太陽より輝く、その美貌は花も月も及ばない」曹雪芹が書いた最も綺麗な詞だと言われています